

偽ること／偽らざることの代償—  
ベティー・シャミー作 *Roar* にみる  
パレスチナをめぐる出自詐称

有馬 弥子

To Falsify or Not to Falsify:  
The Cost of Misrepresenting Palestinian Identity  
in *Roar* by Betty Shamieh

Hiroko Arima

**Abstract**

In the history of American theater, Arab American productions are nothing new; however, since 9-11, the urge to accurately represent themselves has grown keener among Arab and Muslim Americans, especially towards countering prejudice arising from those terrorist attacks. Among the most prominent Arab American playwrights have been Betty Shamieh and Najla Said (the daughter of scholar and intellectual Edward Said and writer and activist Mariam C. Said), who are both of Palestinian descent. Shamieh and her characters are caught in the classic dilemma between celebrating their Arab roots and craving success and assimilation into the American mainstream, especially via artistic productions.

Shamieh's own inner struggles are reflected in four of *Roar's* Palestinian American characters and one Palestinian character. The balance between affinity with Arab culture and retaining painful Palestinian memories varies drastically among them, leading to complex family feuds. Such strife in the shabby Detroit living room, however, can be found among any family of any ethnicity. The author thereby succeeds in making ethnic themes universal and appealing to general audiences. Another significant element is casting musical art as a catalyst that both divides and unites characters and places the universal pursuit of art in the foregrounds.

Yasser Selim argues that Shamieh's plays don't accurately represent Arab identity or capture Palestinian experiences for fear of offending general American readers. This paper, however, asserts that the dilemma between seeking acceptance by American readers and celebrating one's own ethnic distinctions is a core characteristic of this American-born author of Arab and Palestinian descent, and commends Shamieh's *Roar* exactly for these characteristics.

キーワード：ベティー・シャミー、パレスチナ、パレスチナ系アメリカ人、アラブ系アメリカ人、アラブ文化

Key words : Betty Shamieh, Palestine, Palestinian Americans, Arab Americans, Arab culture

## 1. アラブ系アメリカン演劇の変遷とベティー・シャミー

今世紀初め同時多発テロ後、アメリカ社会ではアラブ系に対する偏見が先鋭化した。これをきっかけにアラブ系アメリカンの声なき声を発信する手段の一つとして、アラブ系アメリカ人による演劇活動は活発化した。アリ（Roaa Ali）はこれらについて、事件はアラブ系アメリカン演劇が活性化する触媒となったとさえ述べている。アリは同時多発テロ後のアラブ系アメリカン演劇の変遷を辿るに当り、先ず、その直前2001年6月に設立されアラビア語でランターンを意味するニブラース（Nibras）を挙げている。ニブラースはオフブロードウェイ、ニューヨーク・シアター・ワークショップ（New York Theatre Workshop 以下 NYTW）のカンパニー・イン・レジデンス（Company in Residence）<sup>1</sup>となり、設立メンバーの一人にはサイドの娘で劇作家、女優、活動家であるパレスチナ系アメリカ人、ナジュラ・サイド（Najla Said）がいる。ニブラースとNYTWの提携は約十年で終わったが、その後2012年にはラミース・イッサク（Lameece Issaq）ら三人のアラブ系アメリカ人女性演劇関係者により設立されたアラビア語で光を意味するヌール（Noor）がNYTWのカンパニー・イン・レジデンスとなり、同年6月にはその初演作品 *Food and Fadwa* が成功を収めた。また、ニブラースは団体としては消滅したが、関係者の個人としての創作活動はアリが先の記事を発表した2017年まで続いていた。他にもシカゴをベースとするシルクロード・ライジング

(Silk Road Rising) もニューヨークの先の二団体と同様に同時多発テロ後のアメリカ社会でのアラブ系の周縁化の 이슈を中心的テーマとして芸術活動を続けてきた。

シリンガー (Schillinger) は2004年の記事で、アラブ系劇作家とその作品がいかに多様であるかを論じ、ニブラスによる初の演劇的試み、アラビア語で記録を意味する『サッジル』(Sajjil) は、アラブや中東という括りの内実がいかに多様で、ニブラスの創設者ら自らでさえもアラブとは何か明言できなかったと記している。

シリンガーはこの記事でベティー・シャミーは最も知られている劇作家であるとして、シャミーの三作品、*Chocolate in Heat*、*Roar*、*The Black Eyed & Architecture* を挙げると同時に、これらの作品の創作をめぐるシャミーのアラブ系およびパレスチナ系としてのアイデンティティーについての葛藤に言及している。その中で取り上げられている他のアラブ系劇作家や作品で表現されているもの以上に、サンフランシスコで生まれ育ったシャミーにとってルーツのアイデンティティーと対峙することとアメリカで劇作家としてのキャリアを目指すこととの間での迷いが大きかったことが本記事から窺える。

このことは、パレスチナ系の苦悩や孤立がアラブ系のそれらよりも更に特殊なものであることが要因の一つとなっていることは否めない。パレスチナ問題の影響は政治的領域だけではなく、文芸や文学研究にまで及んでいるからである。文化、学術関係者でさえも、パレスチナ問題を取り上げることが極端な場合には制裁の対象になった例としては、2007年に *Arab American Literary Fictions, Cultures, and Politics* を出版したスティーブン・サライタ (Steven Salaita) が2014年9月にイリノイ大学から採用を取り消されたことをめぐる所謂サライタ論争が挙げられる。2014年7月に勃発したイスラエルとハマスの間のガザ侵攻に対するサライタによる一連のツイートが反イスラエルのであると見なされたことが直接のきっかけであった。

サライタほどには政治的発言はしていないが、ウェストヴァージニア州生まれのサライタと同様にアメリカ生まれのシャミーは、アメリカ育ちでありながらパレスチナ系としてのアイデンティティーを表明しただけで作品の発表の機会が制限されることを恐れていた。シャミーはスクール・オブ・ドラマ・アット・イエール大学 (Yale School of Drama) 在学中の1997年から2000

年の間、アラブ系アメリカ人をめぐるテーマを避けていたと言う。アラブ系としてのアイデンティティーについて、2008年の *The Black Eyed* の序文で「細かい分類にはめ込まれること」<sup>2</sup> (pp. 7-9) に対する拒否反応を感じていたと繰り返し述べている。これらの発言でシャミーが強調していることは、ある程度自分のキャリアが確立し安定するまでは、アラブ系やパレスチナ系のテーマと距離を置かなければ「安心」できなかつたということである。必ずしもシャミーのようなキャリア上の動機からではないにしても、ニブラスを創設したアメリカ生まれ、ニューヨーク、アッパーウェストサイド育ちのナジュラ・サイドも、ニブラスのメンバーは必ずしもアラブ系のアイデンティティーに確信を持っていたわけではなく、自分自身もルーツは認識しつつも、幼少期と大学時代はむしろ「あなたはアラブ系とは違う」と人から言われて「通ってきた」と述べている (Schillinger)。

## 2. シャミー作 *Roar* にみるアラブ文化・パレスチナの歴史の抑圧と出自詐称～偽ること／偽らざることの代償のはざままで～

アラブ系、なかでもパレスチナ系が中東での戦禍を逃れアメリカに移住した場合、出自の文化や苦難の歴史的記憶をどの程度固持していくか葛藤を抱え続け、アメリカ生まれの子孫もその影響を免れないというテーマは、シャミーによる2004年初演の劇作 *Roar* のパレスチナ系五人の登場人物それぞれの異なる在り方に反映されていた。先述の通り、シャミーはこの作品を発表する前にも後にもパレスチナ系の枠にはめ込まれることに抗っているが、*Roar* の登場人物のルーツに対する立ち位置とその変化、それらをめぐって五人がどのように関わり合い時には争うのか、その描き方を通じ2004年時点ではシャミーがいかにこの問題に対峙していたかが表明されている。

五人のうち唯一アメリカ生まれアメリカ育ちなのはヤクーブ (Yacoub) 家の娘アイリーン (Irene) で、その両親、アーメド (Ahmed)、カレマ (Karema)<sup>3</sup> 夫婦、そしてアーメドの兄エイブ (Abe)、カレマの妹ハラ (Hala)<sup>4</sup> は四人ともヨルダンのパレスチナ難民キャンプの出身者である。ハラを除いて、アイリーンを含めた四人はアメリカでの経済的安定や文化的成功を得たいと抗っている。なかでもアイリーンはアメリカでの中東に対する偏見をそのまま模していると解釈できるほど、中東を自分とは関係のない遠い「第三世界」と見なし、その文化を見下している (18)。アメリカでのキャリアしか視野

にないアイリーンに中東のことをより正確に伝え一定の影響を与えるのが、第一幕第二場で登場する叔母のハラである。ハラは湾岸戦争の難を逃れ、アメリカで暮らす姉夫婦一家を頼ってクウェートからデトロイト<sup>5</sup>にやって来る。ハラは五人のうち唯一アメリカ人ではなくパレスチナ人として登場し、五人の中で最もアラブの文化とパレスチナの苦難の記憶を固持しており、ほか四人全員の程度と形は異なるアメリカナイズへの希求を揺るがす人物、四人それぞれをルーツの文化と歴史的記憶に立ち戻らせようとする触媒的存在として提示される。ハラが姉カレマの求めでアイリーンにアラブの歌を教えようとする場面では、アイリーンとの激しい衝突が描かれる。この場面でアイリーンが露骨にアラブ音楽を否定するに当たって、二点のアメリカにおけるアラブ文化に対する典型的な偏見が提示される。一に、アラブの歌は全て政治的であるがゆえに歌としての価値がなく、わけのわからないしろものである、という偏見である。これに対しハラはアイリーンと争いつつ、アラブの歌が民族的特殊性を超えた音楽の普遍的意義を歌い上げているものであることを姪に示す(30)。その会話を通じてアイリーンがある程度アラブ音楽に近づく予兆も感じさせる。もう一点は、アイリーンのアラビア語に対する発言で、アラビア語に特有の軟口蓋音子音について、アメリカではアラビア語は吐き捨てるような音がして汚らしいと差別的に見られることを模している。ただしこれは、アイリーンがアラビア語を知らないことにも起因しており、自分でも歌えるように歌詞を自分の母国語である英語に訳すことを叔母に求める。これに対しハラは、その歌を原語のアラビア語で歌わずに英語に訳してしまったらひどいことになってしまうと言い返し、アラビア語の美しさを強調すると同時に、この歌を学べばどんな歌でも歌えるようになると(31)、再度その歌の普遍的価値を強調する。

さらに本作ではアイリーンが中東での政治問題と親世代の親族が体験したその直接的影響を自分と関連することと捉えるか捉えないかが幾度となく問われる。ハラが登場する前の第一幕第一場で既にこの問題が持ちあがり、それがアメリカでブルース歌手として成功したいアイリーンの出自詐称と結び付けられている。母カレマは本作中アメリカで生活していくこととアラブの文化やパレスチナの苦難の記憶を保持していくこととの間での葛藤が最も大きい人物として提示されるが、親族による出自詐称には断固として反対である。夫であるアイリーンの父アーメドは、アメリカにはアラブ文化を受容

する場がないので出来れば中東に戻りたいと考えているが、アイリーンのためだけにアメリカに残っており、アイリーンをアメリカでブルース歌手として売り出すためには、ブルースの起源であるアフリカの一部でアラブ人口もいるエジプト出身だと名乗るのがよいと考えている。理由として、パレスチナは理論上はあくまでもアジアの一部であり、アフリカ文化とは乖離していると言う。「アメリカでは誰がパレスチナ系のブルース歌手など聞いたことがあるか」と言う夫に対しカレーマは「アメリカではそもそもパレスチナの何かさえ誰も聞いたことはないでしょう」と言う(6)。二人ともアメリカではパレスチナのことを誰も知りもしないと認識していることでは共通している。しかし出自を詐称まですることには反対のカレーマとアイリーンの成功のためには出自を詐称させることも厭わないと考えるアーメドは、この点においては対照的である。カレーマは娘は偽らずにパレスチナ系として名乗るべきだと考えているが、アーメドはパレスチナ系というだけで政治的に警戒されてしまうと考えており、カレーマに、「なぜアイリーンは自分が全く知らない政治問題のせいで損をさせられなければならないのか」(6)と語気を強める。この会話で名前があがるのが、アーメドの兄で既にアメリカでレコード会社の経営に成功していて、何かアイリーンの手助けを頼めそうなエイブである。エイブはアメリカで初めて仕事を得た時からユダヤ系を名乗るようになり、以来カレーマに絶縁されてきた。エイブはルーツの文化や習慣は守りつつも、アメリカで生活していく以上、パレスチナ系というだけで濃い政治的偏向をかき取られ職を得られなくなることを察知していたのである。

アイリーン以外の親世代四人はまた、作中、自分たちの中東での戦禍の体験と如何に対峙するか、しないかについて各々葛藤を抱えていると同時に、それをめぐって言い争いを重ねる。一幕二場でハラが湾岸戦争の難を逃れクウェートから到着した時、アイリーンが叔母の強烈な個性に惹かれ初めは話題がハラのカウェートでの男性関係におよぶが、ハラがクウェートを去らなければならない事柄に触れざるを得なくなると、突然、ハラとカレーマが姉妹で対立する。イラクによるクウェート侵攻と、ハラを巻き込んだクウェート人によるパレスチナ人迫害について話題になりかけるからである。ハラは「やっとな戦争のトラウマを乗り越えて」(10) アメリカに逃れて来た今、もはやそれを話題にしたくはない。これに対し姉はクウェートでパレスチナ

人に起こったことを話題にしないのはパレスチナ人であることをやめることを意味すると考える。ハラは言い返し、過去に姉がクリスチャンであるにもかかわらずイスラム教徒の少年と駆け落ちし結婚したことに言及し、アイリーンは父母の馴れ初めのドラマにも興味を示す。

実はその結婚のいきさつの背後には、アイリーンが一幕中には未だ知らされない母と叔母の苛烈な過去が厳然と存在するのであり、このことは第二幕でハラによって一挙に暴かれる。ヨルダン内戦（Black September）時にヨルダン兵が一家を襲った時の出来事についてである。この事件の直ぐ後に姉カレーマはアメリカ行きのビザを所持する少年を見つめるやいなや彼と結婚しヨルダンを脱し、妹ハラはヨルダンに残された。

本作では、ハラによるヨルダン内戦についての語りは、アイリーンが居間で叔母ハラと父アームドの婚外関係を目撃するところで幕を閉じる第一幕の直後に、第二幕で提示される順序となっている。叔母と父の関係に逆上し、叔母は直ちにヤクブ一家宅を去ってヨルダンに帰るべきだと言うアイリーンに、ハラがヨルダンでの内戦について語るのである。つまり本作では、ヨルダン内戦という政治的事件をめぐるカレーマ、ハラ姉妹の確執は、アメリカ滞在ビザを所持するイスラム教徒男性アームドを夫としたカレーマと、姉の夫と関係を持つに至るハラの一男性をめぐる個人的確執と重ねられ、これを通じて提示される構造となっている。この事件についての語りの中でハラは、パレスチナをめぐる政治的出来事がアイリーンと無関係ではないことを主張し伝えようとする。ハラは「お母さんとその妹に起こったことは、あなた自身も決して理解できない何千もの側面であなた自身に影響するのよ」「あなたは、あなた自身の歴史を知るべきなのよ」(47) と説こうとする。

ハラのこの発言は姉妹を襲った出来事についての以下の内容の語り続く。当時カレーマ、ハラ姉妹とその父母は解放を叫ぶパレスチナ人の居住するヨルダン国内の難民キャンプで生活していた。イスラエルによる攻撃を逃れヨルダンに来たものの、ヨルダン政府がイスラエルと結託し始め、ヨルダン兵がパレスチナ難民キャンプを襲ったのがヨルダン内戦であった。兵士の一団がやって来て幼かったカレーマ、ハラ姉妹の目の前で父を殴りに殴り、母の衣服を剥ぎ取った。煙草をくわえた兵士が「ちっこいのをやってしまえ」(47) と言い、一番大柄な兵士がハラを凌辱した。ハラは酷い仕打ちを受ける父母から目をそらすことができなかつたのである。これに対し姉のカレー

マは半分眠っているふりをして暴行されている父母を見ないようにし、兵士らの目を引かないように目を伏せ続け、その場の難を逃れた。この事件の後、両親は強姦された娘、ハラと目を合わせようとしなかった。因襲的な社会においては娘が凌辱されることは一家の恥だからであった。ハラは両親に避けられ、姉を頼るしかなかったが、姉は直ぐにアメリカに渡ってしまった。

先のハラとアイリーンの言い合いの翌朝、カレーマはその日だけは店を閉め、カレーマ、アーメド、アイリーン、そしてハラの四人は朝食のテーブルにつくが、突然ハラがここを出てヨルダンに帰ると言い、さらに姉に「あなたの夫を数週間だけ借りるわよ」(54)と言うので、姉妹の口論が激しく再燃し、ハラは再びヨルダン内戦時の顛末に言及する。この第八場ではハラは、姉カレーマが両親に見離された自分を残してアメリカへ去ったのは全てを忘却の彼方に追いやるためだったと非難する。これに対しカレーマは「忘れることなどできたはずはない」(56)と言り返す。

ハラの中には、アメリカに生活の拠点を移したカレーマは、パレスチナと一家の被虐体験の記憶を抑圧し故意に忘却していると映っている。また、その娘アイリーンはパレスチナと親世代の苦難を自分とは無関係であると考え距離を置くスタンスを取っているかのように映る。しかし本作は、ハラが存在と発言を通じて、否定や忘却は不可能であること、さらに代償を伴うことを提示している。アイリーンはアメリカでの文化的成功のみを追求しているかのようなのであるが、アーメドによれば学校で友達ができずに成績不振で退学寸前であり、必ずしもアメリカ社会に適応できてはならず(24)、パレスチナという出自を詐称してまで目指しているブルース歌手としてのデビューが実現するかも全く定かではない。ハラは、むしろアラブ音楽も習得したほうが、つまりアラブの文化をも受容したほうが、歌手への道が開かれると仄めかす。

カレーマは、ヨルダン内戦時に自分だけは直接の難を逃れアメリカに渡りアメリカでの生活基盤の構築に邁進しているが、妹ハラの再来により父母と妹が暴行された事実を記憶から消し去ることは不可能であることを突き付けられ、事件の記憶を否定するような生活のし方が親族関係の軋みに直結し、彼女のアメリカでの経済的成功を揺るがすほどとなる。カレーマを去りハラと共にヨルダンに戻るアーメドの選択は、一旦距離を置いたパレスチナの歴史の記憶とアラブ文化への回帰を象徴している。カレーマはアパート数

棟と酒雑貨類店の経営で少なからぬ蓄財を得るが、アラブ音楽は自分にとって郷愁を誘い過ぎるために経営に集中することの妨げとなると感じ、その演奏を夫に禁じ続けてきたことが、夫の不満を募らせる直接の原因となると同時に、アラブの文化を否定した精神的に切り詰めた生活が自分自身の文化的アイデンティティーの抑圧となり、外的な成功と反比例するかのようにな面的核が崩壊していく。

しかしながらカレーマは、パレスチナとアラブに関する歴史の記憶の消去や文化の抑圧などに見られるルーツの否定の頂点とも言うべきパレスチナについての出自詐称には明確に反対である。アーメドの兄エイブはアメリカでの生活を始めた若い頃から50代に至るまでパレスチナの出自を詐称しエジプト系ユダヤ人を名乗り続けレコード会社の経営に成功し、度々カレーマ、アーメド、ハラの間で話題にのぼる。実はかつて中東でエイブとハラは関係を持っていたが、ハラが空港で待ち合わせていたエイブのところに現れなかった事件以来、エイブはハラを憎んでいる。ハラはクウェートを追われ姉一家を頼りデトロイトに来た後で、エイブを頼り復縁を考えるがエイブに拒絶され、行き場を失い、結局アーメドと共に中東に戻る成り行きとなる。エイブをめぐるこれらの展開については、常にカレーマ、ハラ、アーメド、アイリーンの間で話題にのぼるのみで、その間、彼は実際には舞台上に登場しないが、最終場面第二幕第十場で心神耗弱に陥り何もできなくなる母カレーマに替わって今後の生計を計画するにあたりアイリーンが叔父のエイブを呼ぶ場面で、初めて舞台上に登場する。それまでの場面は全て比較的短いが、この最終場面は比較的長く、出自詐称をめぐるエイブとカレーマの激しい口論が繰り返される場面でもあり、エイブの台詞によって本作品全体を貫くパレスチナとアラブのアイデンティティーをめぐる葛藤についての作者シャミーの本作発表の時点での主張が表明されていると言える。その台詞の前には、この場面で初めてエイブ自身により、仕事を得るために出自を詐称せざるを得なかった事情と経緯が語られる。エイブは面接で出身地を聞かれ、パレスチナと答えれば就職できなくなるととっさに思った。エイブはアメリカに来る前にエジプトに六か月滞留していて無縁ではなかったのも、出身地がエジプトであることにしても完全な虚偽には当たらないと考えた。当時エジプトはイスラエルと和平を結んだところで、面接官がそこにはユダヤ人が多く住んでいたことを話題にしたため、エイブはそれを否定しはしなかっただけであっ

た。この会話がきっかけになった出自詐称はエイブの側ではさほど意図的なものではなかったのである。しかも第一幕で既にエイブはユダヤ教に改宗したとまではいかなかったことも話題になっていた(28)。出自詐称を自ら望んだわけではなく、むしろ決して納得しているわけではないエイブはその後、出自など個人的な内容に触れる問いには答えないようにし、それ以上出自について虚偽を述べなくて済むようにやり過ごしてきた。また、出自詐称の罪の意識からか、パレスチナに多額の寄附をしていることもカレーマに伝えるが、カレーマは出自詐称の罪が金額で解決するわけではないと、にべもない。エイブは、アイリーンが、レコードデビューを目指すにあたり、より発音しやすい苗字に変えることを考えていると聞き、強く否定する。この最終場面で初めてエイブ自身により、出自を詐称してきたことの取り返しのつかない代償について語られる。「そんなことをするんじゃないよ。・・・自分が何なのかを偽るんじゃない。なぜって、そんなことをすると、何を成し遂げたってすべてが完全に無意味になっちゃうからだよ。それに、大変なストレスになる。この何年もの間、俺がどんなにイディッシュ語をわかっているふりをしなきゃならなかったことか」(68)。エイブのこの台詞と、アイリーンのためならエイブが家に来ることも許容し彼が「ユダヤ系であるふりを続けるのをやめるように説得するつもり」(71)というカレーマの台詞は、本作品における作者の結論的表明であると言える。

### 3. セリムによる *Roar* の評価とシャミーの主張

セリム(Selim)はシャミーの作品でパレスチナ人を取り上げている二作品、*Roar* と *The Black Eyed* についての論文で、これらの作品はアメリカ、特に白人の読者層に受け入れられるか否かという文学上の検閲に縛られており、必ずしもアラブ系、パレスチナ系アメリカ人の状況と対峙し得てはいないと論じている。セリムはシャミーの創作活動について「自分自身の部屋ではない部屋」<sup>6</sup>で書いているとさえ述べ、結果として、混乱した焦点の定まらないアラブ系アメリカ人像しか描けていないと分析している(*Censorship* 87)。

セリムがあげる一点目は、アメリカの読者層に受け入れられ得るアラブ系アメリカ人像とは、テロリズムとは無関係で西洋側の異国趣味にかなう「オリエンタル」としてのアラブ人であるという点である(*Representation* 295)。また特に同時多発テロ以降のアメリカでは、恐れられる対象としてのアラブ

系の男性像が定着してしまい、アラブ系の女性像のほうがより受け入れられやすい傾向にあることにも言及している。しかし、Roarに登場するアームド、エイブ兄弟は共に音楽関係の営みに従事しており、人物描写としてアラブ男性は暴力的であるというステレオタイプには当てはまらず、また、兄弟がカレーマ、ハラ姉妹やアイリーンを抑圧しているわけではなく、これら親族の女性との関係は一面的ではない。また、カレーマ、ハラ、アイリーンの三人はそれぞれに行動し続ける女性として描かれており、オリエントルの女性は従順で脅威にはならないというステレオタイプにそのまま当てはまっているとは言い難い。<sup>7</sup>

セリムがあげる二点目は、アラブ系の個人的体験やそれらをめぐる創作的語りは中東の政治問題と無関係ではあり得ず、シャミー自身も演劇は人間性を描き切る力により政治的な説得力を持ち得ると述べている（“Representation” 297-98）にもかかわらず、Roarではこの点が明確にされていないということである。セリムは、Roarでは中東の政治問題の核であるパレスチナとイスラエルの衝突に直接触れておらず、むしろアラブ同士の確執、クウェート人とヨルダン人によるパレスチナ人迫害の話題が強調されており、この描き方はアラブ人に政治的な非があるという西側の見方を助長していると述べている（“Representation” 298）。さらに、これはシャミーがアメリカで作品を発表する機会を絶たれることを恐れた結果であると論じている（“Representation” 300-02）。しかし、ハラによるヨルダン内戦についての語りでは、イスラエルが直接関与していたことにも言及されている。また、パレスチナ人個人にとっては直接の危害を加えられたのがイスラエル兵、ヨルダン兵、クウェート人のいずれであっても、悲劇的体験の重大性に変わりはなく、Roarがパレスチナ系の被虐体験を捉えていないとは言えない。サイドが述べるように、政治的には、アラブの諸国間に亀裂を生じさせ、特にパレスチナと境を接していた南のエジプトや東のヨルダンなどのアラブ諸国が一丸となってパレスチナを擁護しないように図ったのはイスラエルであった。サイドは、アラブは本来文化的に一つの集団であるにもかかわらず、指導者らが政治的に怯え、必ずしも一体となって歩んではこなかったことを指摘している（281-288）。このような政治的背景を鑑みるならば、Roarに描かれる、イスラエルが背後にありつつも、直接パレスチナ人を迫害したのはアラブの同胞であったという焦点の当て方こそ、パレスチナにとってのよ

り重大な悲劇を描出していると解釈することができる。

シャミーはまた、アラブ系アメリカンのアイデンティティーについて、シャミーはこれをアラブのルーツから隔てており、二者を繋げてはいないと述べている。しかし、シャミー自身の、そして *Roar* 中のアメリカに留まり生活していこうとしている三人、カレーマ、アイリーン、エイブそれぞれの、相容れないアラブ文化とアメリカ社会の間での解決しないジレンマこそが、アラブ系アメリカ人、なかでもパレスチナ系アメリカ人であることの揺れ幅の本質なのではないか。

シャミー自身もこのような葛藤を抱え続けてきたが、一方で *The Black Eyed* の序文で、パレスチナ、イスラエル間の紛争は親族の体験の核を成していると明確に述べており（8）、決してパレスチナの歴史の記憶を否定しているわけではない。その上で、アメリカで創作に従事していくにあたり、アラブ性、パレスチナ性を前面に出せないジレンマを免れることはできないことに繰り返し言及してきた。

シャミーは2002年に、劇作家ナオミ・ウォレス (Naomi Wallace) が率いる中東を訪れる旅に参加した。この旅は、アメリカの劇作家とパレスチナの現地劇作家が共同して、過酷な状況下でも活発に続けられているパレスチナの演劇活動を支援していく目的の一環として企画実施された。この旅については翌2003年に発表された参加者六人のエッセイを集めた記事に記されており、その中でシャミーは当初ウォレスから声をかけられた時の最初の反応は「とんでもない」というものだったと率直に述べている。もしも両親が60年代にアメリカに移住していなかったならば、両親の出身地である元パレスチナの地のラマラで自分の生活がどれほど困難なものであったかという想像上の事実と向き合いたくはなかったこと、自分は勇気のない人間で、たとえパレスチナの民のためであってもデモに参加するなどの身の安全が保障されない行動をとる気はなく、自宅に留まり劇作を書いているタイプだということを正直に吐露している。もしもその旅に参加したならば、ニューヨークに戻った後で「自分にふりかかる個人的な、またキャリア上の代償の大きさにかかわらず」中東で「見たこと、会った人々について、ありとあらゆる場で話さなければならなくなるであろうから」ウォレスの誘いは断りたかったと書いており、パレスチナと直接関わることによって負わされる犠牲をいかに恐れていたかが窺える。しかしこのエッセイの最後には「それでも結局は参加し

た」こと、その理由として「パレスチナで起こっていることを見ないことの代償、そこで起こっていることがいかに全世界の安定に影響を及ぼすかを見ないことの代償は耐え難いものである」と明白に述べている（“Lives” 288-89）。アメリカで生活しキャリアを築こうとするパレスチナ系がパレスチナ問題と向き合わないことのはかり知れないまでに大きな代償と、パレスチナ系自身がパレスチナ問題に言及することに対して払わせられる個人的及びキャリア上の代償に対する恐れ、そのはざまに置かれることの懊悩の根深さを如実に表している記述である。<sup>8</sup>

この旅行の二年後2004年に *Roar* が上演され、その最終場面でアメリカに残る、あるいは残されるカレーマとエイブが出自の歴史と文化、時には出自そのものを否定することの代償という、アメリカでの生業を維持していくための生活上の必要悪に苦悩し続けるさまが提示されることは、シャミー自身のジレンマ、そしてそれでもパレスチナと向き合わずにはいられない苦悩をそのまま映し出している。

しかし、本作品では、レイブの生存者であるハラが時には野卑なまでに活力ある人物として描かれ、その言動は観客の笑いを誘うこと、生活のためにアラブの文化を自ら否定し続けてきたことの代償の大きさから心神耗弱に陥るカレーマとその娘アイリーンの生活を助けるために最後に突然登場するエイブが二人に要求することはただ一つ、中東の典型的な食べ物である新鮮なファラフェルをごちそうしてもらうことである等々、軽妙でコミカルな要素も多く差し挟まれている。また、姉妹間、夫婦間、親子間の確執と言い争いにより全てが展開する家族劇であるという構造により、ヨルダン内戦や湾岸戦争などの中東の政治的紛争を背景にしつつも、中東政治と直接の関わりがないアメリカの広範な観客層にも理解でき、アラブ系やパレスチナ系の苦悩を訴え得るものとなっている。また、登場人物のほとんどが職業的に音楽関係者であるという設定であり、芸術、殊に音楽がもたらす高揚感、連帯感、救済等々については、普遍的題材として前景化されている。シャミーは2012年にはアスラム（Aslam）によるインタビューの中で、二つの文化圏のはざまに置かれることについて、そのような経験は葛藤を引き起こすものであるが、同時に、人間性の普遍的なテーマへの洞察を深めるものでもあると述べるに至っている。2004年初演の劇作 *Roar* は、この文学的主張を既に成就させたものであり、パレスチナ系の中東での苛烈な歴史およびアラブ系のアメ

リカでの困難な境遇という背景を、家族間の確執を題材とした古典的劇作に劣らない、時には喜劇的な要素も差し挟んだ作品として結実させたものである。

折しも、2023年10月7日には、パレスチナ・ガザ地区を実効支配するイスラム組織ハマスとイスラエルの間で激しい戦闘が勃発し、甚大な数の犠牲者が出続ける事態となった。J・T・ロジャース (J.T. Rogers) の劇作『オスロ』(*Oslo*) の題材にもなったオスロ合意締結以降、欧米をはじめ、また近年では一部のアラブ諸国がイスラエルとの国交を正常化するなど、国際社会がパレスチナ問題を置き去りにしパレスチナが孤立を深めていったことが、この大規模な衝突を引き起こした要因とも言われている。このような未解決の事態を受けて、今後アメリカ演劇界において、本論で言及したアラブ系、ムスリム系、パレスチナ系の劇作家らが、またその他のアメリカ演劇関係者らが、この問題といかに対峙していくのか、いかないのか、それらの動向を注視し見守り続けなければならない。

※本稿は日本学術振興会科学研究費挑戦的研究（萌芽）「東海岸都市部の文学活動にみるアラブ、ムスリム、パレスチナの交錯とディアスポラ性」（課題番号19K21639）による研究成果の一部であり、2022年3月26日に催された日本アメリカ文学会東京支部3月例会、演劇・表象分科会（オンライン）での発表原稿に加筆修正を施したものである。

## Endnotes

- <sup>1</sup> アーティスト・イン・レジデンス（ニッセイ基礎研究所）と同様のコンセプトと思われる。オフブロードウェイNYTWは小規模な劇団等の団体を支援してきたが、2005年にこれを正式にカンパニー・イン・レジデンスというプログラムとして組織した。これは小規模な劇団に、芸術上、組織上の支援を提供し、NYTWのスタッフによる相談窓口を設け、NYTWでのリハーサルや上演の場所、必要な品物、事務所等々を無償で提供する等々の支援を含む。これにより、NYTWは一度ならずアラブ系一座の創作活動、作品発表の拠点となってきた（NYTW）。
- <sup>2</sup> 本論中、序文、作品本文、記事等々からの直接引用については拙訳を用いた。
- <sup>3</sup> 2004年のニュー・グループ（The New Group）による初演ではサリタ・チョウドリーがカレーマ役を演じた。

- 4 上記初演ではアナベラ・シオラがハラ役を演じた。
- 5 作家ディアナ・アブ・ジェイバー (Diana Abu-Jaber) はミシガン州ディアボーンと周囲のデトロイト地域が現在ではアメリカで最もアラブ系移民の人口が多い地域の一つであると記している。
- 6 フェミニズムの重要なテキストであるヴァージニア・ウルフの評論『自分ひとりの部屋』 (*A Room of One's Own*) で掲げられている理想とパレスチナ系アメリカ人作家がアメリカで作家活動をするに当たって置かれている境遇を対比させている。
- 7 Noha Osman Abdalhafiz (ノハ・オスマン・アブダルハフィズ) はシャミー作品を論じ、論文タイトルでもアラブ系女性は弱くはないと主張している。
- 8 2018年に米議会初のパレスチナ系女性議員となったラシダ・タリーブ (Rashida Tlaib) もまた、パレスチナ問題についての見解を明確に表明しつつも、パレスチナ系という枠のみにはめ込まれることに抵抗を示している (Rozina Ali)。2023年9月28日付けのシャミーから筆者宛のメールによると、シャミーは募金活動の催し (fundraiser) でタリーブに会ったことがあるとのことで、2019年4月2日、自身のフェイスブックにタリーブと共に写っている写真を載せている。

#### 参考文献

- Abdalhafiz, Noha Osman. "We're Not Weak: Portraying Arab Women's Power in Betty Shamieh's *The Black Eyed & Roar*." *Journal of the Faculty of Arts*, Vol. 22, Assuit U, April 2019.
- Abu-Jaber, Diana. "For Many Members of the Arab American Diaspora, Mansaf Offers a Taste of Home." *New York Times Style Magazine*, November 11, 2021.
- Ali, Roaa. "The Arab-American Theatre: Still a Struggle for Visibility." *Al Jadid Magazine*, Vol. 21, No. 72, 2017. <<https://aljadid.com/node/2080>>
- Ali, Rozina. "What Rashida Tlaib Represents." *New York Times*, March 3, 2022.
- Foran, Clare. "Rashida Tlaib made history with her swearing-in. Here's what to know about the first Palestinian-American woman to serve in Congress." *CNN Politics*, January 3, 2019.
- Issaq, Lameece, Maha Chehlaoui, and Mancy Vitale. "Meet NYTW Company-in-Residence Noor Theatre." May 15, 2012. <<https://www.youtube.com/watch?v=C9bhnEgvn6E>>
- New York Theatre Workshop. "Companies-in-Residence." <<https://www.nytw.org/artist-workshop/companies-in-residence/>>

- Rogers, J. T. *Oslo*. Theatre Communications Group, 2017.
- Salaita, Steven. *Arab American Literary Fictions, Cultures, and Politics*. Palgrave MacMillan, 2007.
- Schillinger, Liesl. "THEATER; The New 'Arab' Playwrights." *New York Times*, April 4, 2004.  
<<https://www.nytimes.com/2004/04/04/theater/theater-the-new-arab-playwrights.html>>
- Selim, Yasser Fouad. "Arab American Theatre Caught in Censorship: A Study of Betty Shamieh's *Roar* and *The Black Eyed*." *International Journal of Humanities and Social Science*, Vol. 4, No. 3: February, 2014, pp. 81-88.
- . "The Representation of Arab America in Betty Shamieh's *Roar* and *The Black Eyed*." *Comparative American Studies*, December, 2012, pp. 293-303.
- Shamieh, Betty. "Betty Shamieh: Interviewed by Mohammad Aslam." *Montréal Review*, February, 2012. <<https://www.themontrealreview.com/2009/Betty-Shamieh.php>>
- . *The Black Eyed & Architecture*. Broadway Play Publishing Inc., 2008.
- . "Lives I Could Not Have Led." IN "On the Road to Palestine." Kia Corthron, Tony Kushner, Robert O' Hara, Lisa Schlesinger, Betty Shamieh and Naomi Wallace. *The American Theatre Reader: Essays and Conversations from American Theatre Magazine*. Foreword, Paula Vogel. Theatre Communications Group, 2009, pp. 288-289.
- , *Roar*. NY: Broadway Play Publishing Inc., 2004.
- , "You and Rashida Tlaib." E-mail to the author. 28 September, 2023.
- Vogel, Paula. Foreword. *The American Theatre Reader: Essays and Conversations from American Theatre Magazine*. Foreword, Paula Vogel. Theatre Communications Group, 2009.
- サイド、エドワード『オスロからイラクへ——戦争とプロパガンダ2000-2003』中野真紀子訳 みすず書房 2005年。
- ニッセイ基礎研究所『平成24年度文化庁委託事業：諸外国のアーティスト・イン・レジデンスについての調査研究事業 報告書』委託元 文化庁長官官房国際課 2013年3月。